

序論)

みなさんは、「もうだめだ」って思ったことがあるでしょうか（写真表示）。

仕事のノルマをこなすことができなくて「もうだめだ」と思う。大きな失敗をしてしまって「もうだめだ」と思う。人間関係において上手に振る舞うことができなくて「もうだめだ」と思う。そして、病気や震災といった自分の手に終えないような不幸な出来事に直面して「もうだめだ」と思う。

私達は、色々な時に「もうだめだ」と思い絶望してしまいます。

神様に逆らったことによって、同じイスラエル民族で構成された北イスラエル王国が滅び、自分たちもバビロンによって苦しめられ、エルサレムの町が破壊され、遠くバビロンの地に連れて行かれたユダヤ人たちもまた、偶像礼拝がはびこるバビロンの地で、バビロンの人々に見下されて生きる用になった時、「もうだめだ」と思ったのではないのでしょうか。

心の中では神様のことを信じながらも、実際には神様の救いがないように思えるそんな状況の中で、神様を信じ従っていた残りの民といわれる人達の心の中にも「もうだめだ」という思いがどうしても出てきてしまう。そんな心境の人達に対して、神様が慰めのことばを投げかけてくださっているのが今日の箇所となります。

神様は、どのようなことばで【主】の民を慰めてくださっているのでしょうか。みことばによって教えられていきたいと思えます。

### 1) 選びと祝福を与える【主】

まずは1節を読みましょう。

51:1 「義を追い求める者、【主】を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ。

神様は「義を追い求める者」「【主】を尋ね求める者」に呼びかけておられます。

「義を追い求める」とは単純に正義を求めているだけではなくて、罪によって切り離されてしまった神様との関係を回復し、神様と一つになって歩むことを求める人のことを指します。この箇所において「義」とは「【主】なる神様」のことであり、義を追い求めるとは、【主】を探し出して【主】と一つになることを求めるこ

となのです。なぜでしょうか。彼らはバビロン捕囚によって神様に見捨てられ、神様と切り離されているように感じているからです。

実際には前回のメッセージでも確認したように神様はイスラエルを見捨てておられませんでしたが、バビロン捕囚という厳しい現実には彼らに【主】との断絶を感じさせていたのです。

さて、そんな絶望とも思える状況にある神の民に対して、【主】はなんと言われているかというと、「あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ」と言われて、自分たちのルーツに目を向けてみなさい。と言われています。みなさん、イスラエルのルーツとは何でしょうか。それはアブラハムであり、アブラハムの妻サラのことです。だから、神様は2節で

**51:2a** あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラのことを考えてみよ。

といわれているのですが、神様はこのようにアブラハムとサラのことを思い出させた後、

**51:2b** わたしが彼一人を呼び出し、彼を祝福し、彼を増やしたのだ。

と言われています。これはどうゆうことかということ、イスラエルは確かにアブラハムとサラから生み出されていったのですが、「彼らを神の民イスラエルにしたのは、神様がアブラハムを呼び出し、祝福し、増やしたからだ。」と【主】はいわれているのです。みなさん、実際にアブラハムやサラのことを思い出してみましよう。アブラハムやサラは何かとても素晴らしいことをしたから神の民にされたのでしょうか？ いいえ、アブラハムは元々メソポタミアの偶像礼拝の文化の中で育った異教の民でした。また、サラも年老いて自分が子どもを生むなんて信じ切ることが出来なかった人でした。でも、神様がアブラハムを選び、神様が不妊の女であるサラにいのちを与えたから、彼らは約束の子イサクを手に入れることができ、様々な問題を乗り越えて、イスラエルの父祖になることができたのです。

【主】なる神様は人の行いや業によって祝福を与えたり、救いを与えたりする方ではなく、神様の一方的な選びと恵みによってイスラエルを神の民にし、私達を神の

民にしてくださるお方なのです。そして、そのように一方的に恵みを与えてくださる方が3節のように言われています。

**51:3** まことに、【主】はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を【主】の園のようにする。そこには楽しみと喜びがあり、感謝と歌声がある。

「慰め」と訳されている言葉は「あわれみ」と訳すこともできます。一方的にアブラハムたちを選び、不妊のサラを祝福してイスラエル民族を作ってくださった【主】は、今度も一方的な恵みによってイスラエルをあわれみ、荒野のようにイスラエルをエデンの園のように恵みあふれるところ、楽しみと喜びがあり、感謝と歌声が溢れるところにしてくださるのです。これは単純にバビロンから解放してくださるということではなくって、それ以上の罪によって切り離された神様との関係の回復を、義を求め、【主】を求めていた人達に与えてくださるという。神様からの恵みの約束。福音です。エペソ人への手紙でパウロがこのように言っている通りです。

#### エペソ人への手紙

**2:3** 私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

**2:4** しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、

**2:5** 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。

みなさん、【主】は一方的な恵みによって私達を選び、恵みによって私達と【主】との関係を回復させてくださり、エデンの園のような神の国を私達の内に作り上げてくださり、「もうだめだ」と思うような時も、楽しみと喜び、感謝と賛美で溢れるようにしてくださるお方なのです。

これは福音以外のなにものでもありません。

#### 2) 【主】の教えによって諸国を正しくさばき、義と救いを与える【主】

では、神様はどのようにしてこの救いを実行してくださるのでしょうか。それは

【主】のおしえをもって世界をさばき、世界に光を与えることによってです。  
4節を読んでみましょう。

51:4 わたしの民よ、わたしに心を留めよ。わたしの国民よ、わたしに耳を傾けよ。おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを諸国の民の光と定めるからだ。

最初の呼びかけはいいですね。次の「おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを諸国の民の光と定めるからだ。」と語られている、ここに神様が荒野をエデンの園にするための計画が語られています。ここで語られる神様の計画は2つ

- ① おしえを神様のところから出す
- ② 神様のさばきを諸国の光とする

この2つです。これはどうゆうことでしょうか。「おしえ」と訳されていることは「律法」と訳すことができる言葉が使われています。これは神様が律法を世界中に広げて、その律法によるさばきを世界の光にするということではありません。神様が世界に光を与えるためにくださる律法とは、イスラエルに与えられた石の板に書かれた律法ではありません。神様が世界に与える律法とは、聖霊様であり、  
【主】イエスキリストのことです。パウロはこのように言っています。

## II コリント 3:3

あなたがたが、私たちの奉仕の結果としてのキリストの手紙であることは、明らかです。それは、墨によってではなく生ける神の御霊によって、石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。

私達、【主】に救われたものはキリストの教えを持っています。そして、そのキリストのおしえは私達の心にどのように書かれているかという、旧約聖書の律法のように石の板に書かれたのではなくて、御霊なる聖霊によって私達の心に書かれたのです。神様はこのキリストのおしえによって、私達に光を与え、エデンの園のような喜び溢れる神の国を私達の中に作り上げてくださるのです。そして、その結果としてどうなるかという、同じくIIコリント3章にはこのように書かれています。

## Ⅱコリント 3:18

私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

わかるでしょうか。(イザヤ 51:4 を表示)

神様はキリストという【主】の教えを送り出し、聖霊さまによってその教えを私達の心に刻み、それによって正しい裁きをなし、エデンの園のような喜び溢れた神の国を私達に与えてくださり、光、輝かせてくださるのです。

だから、世界はキリストの到来に希望を抱き、期待をするのです。  
イザヤ書 51章5節にこのように書かれている通りです。

**51:5** わたしの義は近く、わたしの救いは現れた。わたしの腕は諸国の民をさばく。島々はわたしを待ち望み、わたしの腕に期待をかける。

みなさん、だからキリストこそが、神様の計画によって用意されていた【主】の義であり、【主】の救いなのです。

### 3) 世は滅びても耐えることのない【主】の義と救い

神様はこの義と救いは決して失われることがないと約束してくださっています。6節を読んでみましょう。

**51:6** 目を天に上げよ。また、下の地を見よ。まことに、天は煙のように消え失せ、地も衣のように古びて、その上に住む者はブヨのように死ぬ。しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義は絶えることがない。

この世のものはいつか消え失せてしまいます。

ヨハネの黙示録には世の終わりの出来事がかかれており、私達はそのことをそのまま信じていますが、例え、あの黙示録に書かれているような不思議な出来事が怒らなくても、現代科学は地球がいつか滅びることを説明しています。それは地球温暖化の先の破滅かもしれないし、地球という惑星の寿命かもしれない。いずれにしても、聖書的にも科学的にもこの世のものはいつか絶対滅びてしまうことは断言され

ているのです。でも神様は言われます。

「しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義は絶えることがない。」  
と、みなさん、神様の救いと義は決して失われることがないのです。  
イエス様も言われました。

### マタイ 24:35

天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

また、ヨハネもこのように言っています。

### I ヨハネ 2:17

世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

みなさん、【主】のみことば、【主】の義、【主】の救いは例え世界が滅んでも決して失われることがないのです。だから、私達はこの世の人達の攻撃を恐れる必要がありません。【主】は言われています。イザヤ書5 1章7節、8節

51:7 義を知る者たちよ、わたしに聞け。心にわたしのおしえを持つ民よ、人のそしりを恐れるな。彼らの、ののしりにくじけるな。

51:8 まことに、シミが彼らを衣のように食い尽くし、虫が彼らを羊毛のように食い尽くす。しかし、わたしの義はとこしえに続き、わたしの救いは代々にわたる。」

みなさん、この世の人達は私達の信仰や私達がキリストに従って生きようとすることをバカにしたり、見下したり、時には愚か者だと攻撃してきたりします。

でも、そういった世の人たちのことばを恐れる必要はないのです。

なぜならば、そういった人達が頼りにしているこの世の知恵とか、科学とか、この世の富、そして、そういった人達自身もいずれ失われてしまうものであり、私達が信じている【主】のことばと、その義は永遠に失われないからです。

これは旧約聖書にも、新約聖書にも書かれている神様の約束であり、保証です。私達は決して失われない義と救いを与えられているのです。

だから、この世の人達のことばを恐れることなく、【主】のことば、キリストのことばを信じ続けていきましょう。

#### 4) 義を求める者の叫びと信仰

しかし、そうはいつでも、眼の前の厳しい現実。辛く、苦しい現実に直面するとき、「神様、早く救ってください」「早く神様の義を示してください」と言いたくなることもあるのではないのでしょうか。

9節から11節のことばは、正確には誰のことばなのか不明ですが、恐らくイザヤが民を代表して叫んでいる言葉ではないかと言われています。

【主】の救いの約束を直接聞いているイザヤでさえ、【主】の前にこのように叫ぶのです。9節、10節を読んでみましょう。

**51:9** 目覚めよ、目覚めよ。力をまとえ、【主】の御腕よ。目覚めよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。  
**51:10** 海を、大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々が通るようにしたのは、あなたではないか。

「【主】の御腕」というのは、神様の救いの腕のことであり、広い意味では【主】イエスキリストのことです。この人は【主】に向かって、「目覚めよ。目覚めよ。」と命じています。「目覚めよ」というのは、「奮い立って」とか、「立ち上がって」という意味です。この人は【主】の救いの声を聞きつつも、今、その救いのために「立ち上がれ」と【主】に叫んでいるのです。ただし、これは不信仰のゆえに叫んでいるわけじゃなくて、【主】は過去に既に救いの御業をなされていたからです。9節の「昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。」というの、ラハブがエジプトのことをしめし、竜がエジプトの王ファラオのことをしめしています。【主】はイスラエルを救い出すためにエジプトを倒し、エジプトの王ファラオを倒されました。10節の「海を、大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々が通るようにしたのは、あなたではないか。」というのも同じで、神様が出エジプトの時に海を開いてイスラエルを救い出してくださったことを指しています。

「【主】よ。あなたは出エジプトの時にエジプトを倒し、救いの道を開いてくださったのだから、今、そのために奮い立ってください」とこの人は言っているのです。

みなさん、神様の救いの約束、救いの計画を教えてもらっても、目の前の現実が厳しい状況の時、今、助けてください。救ってください。と私達は叫びたくなります。聖書に書かれている救い。出エジプトの救いや、イエス様の十字架の救いを信じているからこそ、今、奮い立って私達を救ってくださいと叫びたくなるのです。

みなさん、その時どうしたらいいのでしょうか。その時は叫んでいいのです。

本来、【主】に対して「目覚めよ、目覚めよ。ちからをまとめ」なんて命令するのは不遜なことであり、あってはいけないことです。

でも、神様はこのような叫びを聖書の中で語らせている。なぜでしょうか。

【主】を信じ、【主】に救いを求め、【主】の義を追い求める者は、このように叫んで良い権利を与えられているからです。

信じているからこそ、求める苦しみの叫びは、私達は素直に叫んでいいのです。

そして、その上で、私達は【主】への信仰を告白するのです。11節を読みましよう。

**51:11 【主】に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。**

## 結論)

みなさん、みなさんは【主】の義を求めておられるでしょうか。

【主】を探し求めておられるでしょうか。

今年、大きな被害を受けた能登は、今度は大雨によって被害を受けたそうです。あのように大きな被害を受け続けたのならば、「もうだめだ」と叫ばずにはいられなかったのではないのでしょうか。

私達は「もうだめだ」と叫びたくなる現実に直面することがあります。特に自分の罪に押しつぶされそうになったり、神様に見捨てられたように思える厳しい状況に陥ったりするときに、【主】を求め、【主】の救いを求めたくなります。

そんな、私達に対して【主】は言われます。「アブラハムやサラを選んで一方的な恵みを与えたように、あなたたちのことも憐れんで、荒野をエデンに、砂漠を【主】の園にするような恵み、あなた達に神の国を与える恵みを与えてあげる。

そのためにキリストを送り、【主】の教えを伝えさせ、聖霊による救いを与えてくださる」と。

そして、「この【主】の義と救いは永遠に失われない」と……。

だから、みなさん、この【主】の福音に望みを抱き、希望を持ちましょう。

もちろん、厳しい状況にあるときは叫びたくもなります。その時は叫んでください。「【主】を今、救ってください。今、御業をなしてください。」と……。

そして、その上で【主】の救いを信じ信仰告白をしましょう。

**51:11** 【主】に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。

このことばを私達の信仰の確信にしたいと思います。

最後にもう一度、【主】の救いの約束に目を向けて終わりたいと思います。

**51:4** わたしの民よ、わたしに心を留めよ。わたしの国民よ、わたしに耳を傾けよ。おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを諸国の民の光と定めるからだ。

お祈りします。